

学校法人 武陽学園

西武台中学校  
西武台千葉高等学校

# バドミントン

BADMINTON

— SWEET TEN 10年のあゆみ 1996 —



はじめに

西武台千葉高等学校バドミントン部は、10年目を迎えましたが、その年に運良く男女とも千葉県で優勝することができ、新たな10年に益々拍車がかかります。

今回の優勝は一言で言うならば「合作」ということになるでしょう。選手はもちろん、保護者の方々、校長先生をはじめとする本校職員の皆様そして地元また合宿の地、信州と、様々な方のお力添えによって作られた喜びのようでありました。それに加え、私に初めてラケットを握らせて下さった坂本先生（新座市教委）、加藤先生（埼玉栄高監督）、いつも公私共々お世話になっている秋山先生（武里中監督）、小野先生（六実中監督）の暖かいご指導によるものであります。この場をお借りしまして、皆様方に謹んで感謝を申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

平成8年7月吉日

西武台千葉高等学校バドミントン部監督 高瀬 秀雄

## V o l . I 源流を求めて

正式には部員は、男子21名でスタート。(1年生が16名、2年生が5名) 体育館には、2面分だけのボールとネット。ラインはまだない。私が今まで、一番印象深い試合はこんな中で生まれた。

昭和63年の夏は、いつになく暑く感じた。たが、部員は何かにとりつかれたように練習した。当時私は指導者としてきわめて未熟だった。それに加えて本校初のオーストラリアホームステイの準備、そして7月下旬からの引率で学校を空けざるを得なかった。そんな夏の終わりに、例年通りのブロック大会が行われた。田中先生率いる(現千葉商高教頭)野田北高校体育館で行われた個人戦最終日。我がチームの2年生エース田巻君がノーシードから勝ち上がった。スポーツ推薦のなかった当時、中学で多少なりともバドミントンをやっていた者の中ではこの田巻が最も強かった。身長160cm位、やせ型で小柄ながら、目が大きくきらきら輝く選手だった。無口で黙々と練習に向かう彼の姿勢は、それだけで私の心をとらえた。勝ち目はないと思っていたこの大会で、彼はあれよあれよと決勝戦へ。野田北エース、戸辺選手(身長180cm位)と戦う。田巻はたじろぎもせず向かった。小さな頭に真っ白なハチマキ。相手を1ラリー毎にキリッと見据える。第1ゲームは落としたものの彼の攻撃はますます冴え、2ゲーム目をとった。ファイナルゲームまでのわずかなインターバルで私は彼にアドバイスをしようとした。しかし、彼の目がまぶしくて圧倒された。こんな経験は初めてなので、私は彼を見つめることしかできなかった。汗だく顔。当時はユニフォームは一枚きりで着替えがない。びしょ濡れたシャツの背には「武陽学園」。場内は野田北独占状態の中に入り込んだこの小さな戦士に、驚きと少しの感動が生まれ、それが少しずつ広まり、ついには場内のほとんどの者が田巻の応援を始める。セッティング、場内の応援は最高潮に達する。特に女の子の声が響く。一本決める毎に、相手をヨシッとにらみ、声をかける。「正々堂々」そのものである。田巻のスマッシュが決まる。大声援、部員みんなが喜んでいる。こんなに感動したのは初めてだった。たかがブロックの夏季大会。だけど、私のバドミントンへの情熱の鍵は、この試合で確かに開いた。それからは何かにとりつかれたように打ち込む。歩いても、夢の中でも。妻に「おかしいよ」と言われるくらいに「狂って」しまった。

その年の秋、合宿所が完成した。新しいタタミ、きれいな風呂。選手たちははしゃいでいた。夜、ミーティングを行うため部屋に彼らを集めた。湯上がり  
の彼らは、ニコニコして部屋に入ってきた。私の前で円陣を組んで、正座をし  
そうになったので長座を勧めた。私も何かうれしかった。と その時、田巻の足  
が目に入ってきた。皮がむけボロボロになった足の裏。所々に痛々しいキズ・  
…。私にも、そしてバドミントンをやっている者なら誰でも少なからず足の裏  
はボロボロになるが、田巻のそれは普通ではなかった。そう言えば彼は数日で  
シューズを壊すくらいフットワークの激しい選手だった。私はショックで言葉  
がでなかった。『おまえ、大丈夫か……?』。そうなのである。当然とは思っ  
ていたが、選手は毎日必死なのである。この足も私の練習のせいでこうなっ  
たのだ。しまった、と思った。選手のことをおまえはどう思っているのか？彼ら  
の声が聞こえているのか？と。試合に勝った感動と彼らのボロボロの足の裏を  
見たショック、指導者としての自覚、責任、そして、主人公は選手である、と  
いう原点を教わった。

幼い頃から、銀行員である父親の度重なる転勤で、落ち着いて友人作りや勉  
強をできなかった田巻は、この高校でバドミントン部の英雄になった。その上、  
3年生で受験勉強に専念し、大学にも合格し、今では立派な社会人になった。  
ちなみに彼は、六実中の小野先生の1年目の選手である。が、残念ながらその  
当時は、まだ先生と私は交流は薄かった。

今の私の、そしてバドミントン部の礎となったのは、彼ら1、2期の選手で  
ある。未熟な私は、彼らを関東大会、全国大会にこそ連れていくことができな  
かったが、今まで生きてきて最高の贈り物もらった感じがする。是非、10  
年目の選手も覚えてほしい。

君たちを支えているのは、彼らであることを……。



## バドミントン部十周年にあたり

保護者会OB会 会長 荒井 孝一

この度の西武台千葉高等学校バドミントン部創立十周年記念誌発行、心からお祝い申し上げます。部員皆様方の、日頃からの錬磨された成果が発揮されて、年を追うごとに優秀な成績を上げられていることは、誠にご同慶にたえません。また高瀬先生をはじめとする諸先生方の温かい御指導に感謝し、厚くお礼を申し上げます。

バドミントン部保護者会発足当時を思い出しますが、あの暗幕で閉め切った暑い体育館での練習を見学した時のことです。先生はまだ新婚間もなく、奥さんと共に日曜日を返上して、私たちの子供を指導されていた姿は今でも私の心に深く刻み込まれています。この時保護者さんと相談する機会を持ち、先生の努力に応えるべく、子供、先生、保護者の絆を作り上げ、また卒業しても部活の生活を心の片隅に残して頂けるような部になればと考えて、保護者会を発足しました。この素晴らしい伝統が、今後も末永く受け継がれていくことを願ってやみません。

最後にバドミントン部が更なる御活躍と、保護者会の益々のご発展を祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。



男子だけの川原のバーベキュー '88



'89年 荒井会長の音頭で始まった保護者会  
埼玉西武台ラグビー部合同もちつき大会